

特集

医療と経済格差

「格差問題」が様々な形で活発に論じられるようになってきていることは言うまでもない。日本において経済格差は本当に広がっているのかという事実認識や、そもそも格差というものをどう評価するかという価値判断を含め、今後もさらに様々な議論が展開していくと思われる。

こうした中で、医療における格差問題が急速にクローズアップされるようになっていく。戦後の日本の医療政策においては、国民皆保険をベースとする「アクセスの平等」が基本的な理念として存在したため、近年に至るまで「医療における格差問題」が論じられる余地は少なかった。ところが、上記のような日本社会それ自体の中での経済格差拡大という点に加えて、近年進められている医療改革（患者自己負担の引き上げ、混合診療の拡大等）の帰結としても、医療における格差というテーマが現在大きく浮上するに至っている。近藤克則氏の著作『健康格差社会』もこうした状況に一石を投じるものであった。

以上のような意味で、本誌がはじめて「格差」というテーマを取り上げるのは、医療をめぐる時代の急速な変化を色濃く反映したものといえる。目次をご覧ください。目次を閲覧いただければわかるように、日本社会における格差全般に関する話に始まり、医療における格差の状況や政策対応、MSWの視点からの格差問題の現場の把握、病院経営にとって現実的な課題となっている医療費未払い問題、雇用形態のあり方と様々な格差という具合に、このテーマに関する重要な論点がほぼカバーされているとともに、国際比較の視点として、欧米と日本の比較、およびイギリス、中国の状況についての論考が入っている。医療における格差問題についての、包括的かつユニークな特集内容となっていることを期している次第である。

読者にとって、本特集が、現在の日本の医療が直面している新たな課題についての視点を提供するものとなることを切に願うものである。

広井 良典
千葉大学法経学部教授